

能性について、筆者の社会学的背景を吟味しつつ、考察してみたい。

2. 社会学の視点と人間関係科教育

「社会」という言葉が今日のような意味で日常会話の中で頻繁に使われるようになったのは、比較的最近の事である。従って社会学が創始された時、研究者達の最大の関心事は「社会とは一体何なのか」ということであった。そこから出発して社会をできるだけ客観的にとらえていこうとする努力がなされたのは当然の事であろう。

社会学は一般に様々な社会現象を客観的に観察し、分析することを主な使命としている。しかし、私達が社会現象といったとき、私達は分かち難くその社会現象の中に自らの身をおき、影響を受けている。そして、自らがそのなかに身をおく社会現象を出来る限り「客観的」に究明するために研究者の側には「没価値」であることが要求された。しかし検証可能な客観性と没価値性のみを追求することはさまざまな社会現象に影響を及ぼす人間の内面にあるものを無視することとなり、その社会現象の人間にとっての意味を考慮しながら適切に社会現象を把握する事は難しくなる。Max Weberはこの点に着目して理念型方法論と、人間の社会的行為の意味を理解しようとする「理解社会学」を提言した。理解社会学は「主体と客体との即時的な同一性の対目的分離」（福武、1975）を超越しようとするものであった。しかしこの事はいうべくしてなかなか実現しうるものではない。

これまでの社会学の主流は論理で物事を分析し一般化しようとする西欧の科学思想の流れにくみするものであった。社会の様々な出来事を対象化し、客観化して分析することは、いわゆる科学としての整合性の条件を満たすものではあっても、その中で生き、生活している個々の人々とのつながりは断ち切られることが多い。

しかし、最近の社会学ではこの社会的事象を対象化する事により生じる主体と客体の間の距離を縮めようとする動きがみられる。エスノメソドロジイをはじめとし、ライフコース研究や生活史研究は社会的事象の唯一性に着目すると同時に、そのなかに生きる個人にとっての意味をさぐろうとしている。「社会とは何だろう」という問いかけは、どのような社会的アプローチにも共通する出発点であるが、「何にとって」あるいは「誰にとって」という視点は必ずしも社会学者の間で一致していない。単に「ソシオロジー」ではなく「ライフロング」（生涯にわたる）という言葉を表題としたテキストブック（山本慶裕・元田州彦編 ライフロング・ソシオロジー 東海大学出版会）は、そのテキストの執筆者たちに共通する社会的なまなざしの位置を示そうとしたからである。すなわち、個人的な視点、主観的な視点、日常的な視点の中で、私達が構成する社会の意味を問い直していくという位置である。例えば このテキスト

ブックの第5章「かわる」を見てみよう。「社会の変化と個人」と副題をつけられたこの章は、社会学の中で社会変動論として取り扱われたものを題材とし、トレンド分析、生活史アプローチを紹介したのち、近代資本主義の発展に裏付けられた産業化を变化の中心にすえている。そしてポスト産業化社会の諸相を社会に生きる男女のライフコースの変化としてとりあげている。このテキストの執筆者たちは“伝統的”社会学の大きな社会変動論を取り上げながらも、社会の変動をできるだけ個人の視点から見ようとしている。

この節でこれまで述べてきたような社会学の状況は人間関係科の教育とどのようなつながるのであろうか。

人間関係科は創設当時、人間関係学習の基礎として哲学的、心理学的、社会学的基礎という3本の柱を持つカリキュラムとして構築されていた。この3本の柱をとりまく学習は出来る限り「体験学習方式」に沿って展開されることがとりきめられた。社会学的基礎は当初様々な制約により、どちらかと言えば社会心理学的領域にひろがり、個人の社会化、社会や集団の中の対人関係などが主な学習の主題であった。「社会」というのは究極的には個人に還元され、個人の社会的行動、特に対人関係について学ぶことは「社会」を理解するためには欠くことが出来ず、社会で生活する私達の人間関係を学ぶ上で第一義的意味を持つのは当然である。しかし、その個人の行動、対人関係もより広い社会の産業化・情報化・国際化等の社会変動の影響を受けていることも忘れてはならない。人間関係科の教育が検討された時、繰り返し「より広い社会」に目を向けられるような、またより広い社会や世界の動きと関われる人材の養成をはかるべきであるという声ができるのもそのためであろう。

人間関係科の基本的教育理念は、人間の尊厳のためにと言うことと、“今、ここで”での関係の中に生きるということから成り立っている。人間の尊厳のためにという教育は、「愛と対話の理解と実践をめざし、超越的存在に対する理解と自分の生き方の明確化をはかり、かつ現代社会の中での人間の問題に対する感受性とそれへ積極的に関与する姿勢を養うと言うことである。“今、ここで”の関係の中に生きる（教育）とは、自己、他者、関係に気づき、自己開示とフィードバックをしつつ共感的理解、おたがいの受容と尊重の中で、それぞれの実存と共同存在を確認することである。また、人間（個人）とは身体、欲求、感情、思考、精神などの統合された全体で、行動し、応答する主体であるとした上で、意識し、思考し、選択する主体が自己超越的、関係的存在としての側面を持つこと」（山口、人間関係研究センター紀要 No.5,1987年）p.171〜）が学習されなければならない。

この基本的理念にたって教育カリキュラムは構築されており、3つの方向が考えられる。すなわち、超越者に向か方向、自己に向かう方向、そして他者・社会に向かう方向で、これらの3方向が相互に関連し、最終的には一人一人の

人格の中に統合される。社会に向かう方向の中で、目まぐるしく変動する社会、科学技術の驚異的進歩と平行して環境破壊・失業と飢餓・宗教的民族的対立などの問題は、一見すると“平穏な”今日の日本社会からはるか遠くにある問題のようにみられがちであり、学生達の日常会話の中にそれらの問題が取り上げられたり、毎朝、新聞に目を通す際にそれに関連する記事を継続的に読むといった可能性は殆どないといっても過言ではないであろう。この方向における学びの為には社会学的視点、特に「何にとって」、あるいは「誰にとって」をふまえた上での見方、考え方は有効であろう。今日の自分達の生活からはるかに遠いように見える世界で起っていることも、自己の「人間の問題」につながるものとしたとき、自分にとっての意味をもつことになる。

人間関係科の教育のいま一つの特徴は、学生と教師が「共に学ぶ」ということである。そのために、学生の関心事の根底にあるものに教師は関心を持たなくてはならないが、其の際、教師がしばしばぶつかる“壁”は、「自分は何に関心があるのかわからない」という学生の状態である。とすると、とりあえず自分の身の回りの事柄にあまり関心のないようにみえる学生や、一見自分からは遠いと思われる問題に目を向けたがらない学生ひとりひとりの根底にある「ペルソナ」をゆさぶり、その特徴である「他とのかかわりあい」(犬養, 1990)の可能性をもつ自己をよびさます試みがなされなければならない。そしてひとたびよびさまされた「他とのかかわりあい」に対する感受性の豊かさ、みずみずしさは教師のそれをしのぐことも多く、教師と学生は刺激し合い学び合うものとなる。この事は社会事象を対象化してみようとする社会学が、それらの事象を研究者自身の問題とつなげて、理解・共感しようとする動きと相通じ、学生は「傍観者」から「共感者」、または「援助者」へと変えられていくことになる。

3. 「かわる」ことの可能性に向けて

ここでは、人格心理学に深く立ち入ることは避けるが、幼少時に形成された基本的人格は生涯変わらないといわれており、その意味で人間が根本から変わることは期待できない。しかし、幼少時に形成された人格の基本的方向性に立ちながらも、いまひとつの変化は、個人が自らの見方、考え方、人との関り方に気づき、それらを能動的に変えていくものがある。たとえば自分のものの見方がおおざっぱであることに気づき、もう少し丁寧にものを見たいと思った個人が、努力して丹念にものを見ることにより、身近な世界に色々興味あるものを発見し、それを手がかりに、それまで未知だった世界にふみ込んでいき、その結果その人の中に変化がもたらされるというものである。その未知だった世界との出会いがその人にとってかなり衝撃的だった場合、変化はその人のかかなり深い部分にまで影響することすら可能であろう。自分が関心を持つ対象は変

わることは可能であり、その変化は実は非常に意味のある変化であると思われる。この意味で人は生きている限り変わることが可能であり、高齢化社会にあっては再考を要する変化なのかも知れない。

1991年度、人間関係科の必修科目である2年生向け人間関係原論では、「“変化”より自分らしく（人間らしく）生きるために」を前期のテーマとして授業をおこなった。その中で取り上げようとした変化をめぐる様々な様態を順不同で挙げてみよう。

「変化の中で生きる」「変化」と「生きる」という語をつなげて、身近に

引きつけた場合、意図しなくても生きている限り変わっていく

変化と生成のプロセス

知ることとは変化することの始まり

変化に対応して／立ち向かって生きる

仕方がない変化もある 一生と死

自分にとっての変化を受容していくか？ 受動／能動？

集団の中でマイノリティ（小数派）が変化を引き起こせるのか？

経験（体験）によって変化をもたらすとは？ そのメカニズムは？

影響を与える／受ける

影響を受けるが与えていない — 与えているという実感が薄い

自分や他者の存在価値は

短期大学1年間の変化は成長といえるか

誰によって／何によっての変化か

最近気になってきたことがあるか

変えるのか／変わるのか／変えられるのか

自分の意志で／自然の中で／受身的／主体的

変化に耐えられない自分／変化しないことに耐えられない自分

変化する社会の中で 身体／精神／環境／異文化

変化したくない／変化するのがこわい

変化に対する不安 — 自分がなくなるみたいだ

変容 — 見る主体が変わる／対象が変わる

自分にとって変化を受容していくか？ 受身／能動的？

私達は生きている限り変化と無関係ではありえない。そして、あえて変化を引き起こすことも必要であろう。筆者は人間のおかれた様々な状況をさぐり、その実存と共同存在を確認すること、言いかえるならばそこでの生き方を自分の生き方と重ねながら共感的に理解する態度を築くことは、個人の中に確固たる変化をもたらすと考えている。そのような教育は今日の社会においては特に必要であろう。

4. 各論 「国際・社会・変革」の授業

人間関係科の専門各論として開講されるべき科目を検討した際に、現代に生きる人間として社会的、国際的問題と如何に関わっていくべきかを探る科目が必要であると提案された。その科目は体験学習により自分の意識や価値観を探りながら自己の行動変容を旨とする人間関係科にあっては、さまざまな問題を対象化して知識としてのみ学ぶのではなく、自己の中になんらかの変化をもたらすものでなければならないと考えられた。その結果、「国際・社会・変革」という科目が生まれたのである。この科目名にある「・」は「その中に生きる」ということを意味していると筆者は考えている。従って、「人間とは」という哲学的な考察から、「いま、社会や世界で起こっていること」までも社会学的視点にたつて包括的かつ個別的に考察しようとする漠とした無謀ともいえる科目である。担当者がとりあえず哲学的背景をもつ者と社会学的背景を持つ者という2教員であることも、この科目の特徴といえるかもしれない。

この科目はⅠとⅡからなり、Ⅰの“ねらい”は「国際化時代に積極的に対応していける人間となるためには、どんな問題意識をもち、それらの問題にかかわりながらどのように自己の変革につとめていけばよいかをともにさぐる」としている。またⅡの“ねらい”は「国際・社会・変革Ⅰで学んだ今日の社会の現状認識の上にたつて、私たちはいかにその現状に対処できるかを探る」である。

この“ねらい”を十分に達成することは至難のわざと言えるかも知れないし、考えようによっては何をやっても当てはまっていくことなのかも知れない。まさに暗中模索の現状であるが1989年度から1993年度までの4サイクルの期間に幾らか共通して定着してきた授業内容を述べてみよう。

第1段階

- 1) オリエンテーション、自分の授業におけるねらいや授業に対する期待を表現してみる
- 2) 社会的、国際的レベルにおいての各自の問題意識状況の明確化
何も見ないで世界地図をかいてみる
様々な世界地図の可能性を探る
自分の世界の中心と他の国の人々の世界の中心の比較
新聞記事を丹念に、継続的に読んでみる
- 3) 問題意識を深める方向を探る
犬養道子著「個人と國と国際と」等を読む
読み方は同じ章を異なるグループで読み、内容をまとめて発表し、グループによる焦点の絞り方の違いを討議

第2段階

- 1) 問題意識の領域をを拡大してみる
異なる世界を映し出すビデオ等を見る
様々な文献をさぐる
関連する施設を訪問する
- 2) 自分の関心領域をきめ、テーマをしぼる
個人、またはグループでのテーマ研究
自分で資料を探す
- 3) 各自のテーマ研究の発表と討議
文献から学んだことを自分の言葉で語り、伝えてみることに意味がある

第3段階

- 1) 各自が学んだことや問題意識を他の人々にアピールしてみる
情報を収録したパネルや問題提起を促すポスターなどの作成・展示

使用したテキスト

犬養道子著	「飢餓と難民」	岩波ブックレット
〃	「個人と国と国際と」	〃
中根千枝著	「タテ社会の人間関係」	講談社現代新書
土居健郎著	「甘えの構造」	弘文堂

第4サイクルの後半にさしかかって進行中の「国際・社会・変革」の授業では、ちょうど1993年が「先住民のための国際年」ということから「先住民の人権」を共通テーマとして、受講生が自分に関心のある先住民について調べた。このテーマについては、多くの点で私達の常識に疑問を投げかけるものがあり、それぞれの発表は聞く者の心を揺さぶることが少なくなかった。受講生達は自分達の問題意識や学んだ事を学祭等の機会を活用してより多くの人にアピールすることを計画している。この「アピールする」ということは、問題意識・問題状況とそれに対する自分の共感等を自己の内側から発し表現してみることである。この段階で多くの学生は明らかに傍観者から共感者へと変化するようであり、この授業の最も重要な「終わりであって始まりとなる」段階であろう。

テーマ選び、文献さがしに始まり、学んだ事をまとめたり、他者に伝えたりする長い過程を通して、筆者は学生達の中に何かが起こり、それは彼女達が授業としては終わりの段階で傍観者から共感者へと変化する事へとつながると期待したい。

5. 傍観者から共感者へ

「まずなによりも、自分も見捨てられた要らない人間なのではないのだと感じてもらいたいです。自分を大事に思っている、自分にいてほしいと願っている人がいるのだと知ってもらいたいです。少なくとも、生きている数時間のあいだでも、忘れられてはいないのだ、自分を大事の思っで仕えてくれる若い人たちがいるのだということを知ってもらいたいです。」

これは昨年、人間関係科20周年を記念して人間関係科の教職員と学生が上演した 竹内敏晴作 朗読劇「愛の侵略－マザー・テレサの生涯」の中で、マザー・テレサが語る言葉の一つである。筆者は劇の前半のマザー・テレサ役を演じたことから、劇の中でこの言葉を言わなければならなかった。せりふの一部と思えば熱心に記憶すればすらすらと言えそうなこの言葉が、なぜか途中でつまってしまい、なめらかにはいえなかった。そして、筆者は一つ一つの言葉をゆっくりと選びながら語られるマザーのお姿を思い浮かべ、自分でそうあらねばならないことはわかっている、現実にはそうでない自分の心に痛みを感じながら、なんとか本番を切り抜けた。その時の心の痛みは未だに筆者の中にあり、痛みを感じることで自分の中でよく説明できない何かが変わったと実感している。

この体験は意味のあるメッセージを自分の中に取り込み自分の体を通して発してみる時に感ずる痛み、喜び、怒りが自己変革への一歩であることを筆者に教えてくれた。

傍観者から共感者へと変わるといふことはこのようなことではないだろうか。そのためには問題意識を持ち、その問題をめぐって「何のために」とか「誰のために」とかの答えが得られない状態での忍耐を要する模索をし、自分が答えとおぼしきあたりを、たとえ稚拙であっても他者に伝えてみるなかで何かを感じ取ることによって起こってくる変化なのではないだろうか。

参考文献

福武 直 「社会学と現実」I 社会科学と価値判断

福武直著作集 第3巻 東京大学出版会 1975年

犬養道子 「個人と国と国際と」 岩波ブックレット 1990年

山口真人 「人間関係科の授業における個と集団の問題をめぐって

－心理学的基礎論の視点から－」人間関係研究センター紀要 No.5、1987、p.171～

山本慶裕・元田州彦編 ライフロング・ソシオロジー 東海大学出版会 1991年